

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

2月26日に発生した岩手県大船渡市の大規模山林火災は約2900ヘクタール焼損、3月に入っても鎮火のめどが立たなかったほどの惨事だった。米ロサ

ンゼルスの大木山火事現場では、被害からの復興を目指す若者やその家族に安全な場所を提供することを目的に少年野球場とソフトボール球場計画を進めるとドジャース財団が2つの「ドジャーズ・ドリームフィールド(野球場)」の建設を発表。災害以前の現状に復元するのではなく、地域活性化につながる手法を展開した。

法隆寺専属の宮大工、西岡常一棟梁の著書「木のいのち木のこところ 天」によれば、山の南側の木は細いが強い。北側は太いが柔らかい。陰で育った木

は弱い。山で木を見ながら建物のごく使うか考える。と記述している。法隆寺の棟梁に伝わる口伝に「堂塔建立の用材は木を買わずに山を買え」がある。消失した山林を再生するにも、如何に価値ある用材を植林するかの知恵が必要だ。また産業復興の場面でも、温暖化によりミカンの産地が静岡県エリアから東北エリアになるとの情報もある。災い転じて福となす」ではないが、この激甚災害の現

## 人口減社会への危機感が求められている

場が新たな地域復興の場になってほしいと願ってしまふ。村上誠一郎総務相は衆議院総務委員会で、個人的見解と前置きしたうえで、21世紀に仮に人口が現在の半分の5千万〜6千万人になつた場合、国県市町村というシステムが構成できるか非常に危惧を持ってしていると語り、質疑で今のような1700以上の市町村の構成は難しい、全国を大抵30万〜40万人で区切るならば、300〜400



樹木への着雪による樹木の被害が多発している。二次被害が心配だ。

の市で済む。極端なことを言うと、県庁も全部いらぬし、道州制も意味がないと述べた。総務相の発言には驚きを感じた。

一休和尚が臨終の時「仏教が減るか、大徳寺が潰れるかというような一大事が生じたら、この箱を開けなさい」と遺言を述べて1つの箱を弟子に手渡した。それから長い歳月が経過して、大徳寺の存続に関わる重大な問題が起き、箱を開けると中に入っていたのは一枚の紙。そこに書かれていたのは「なるようになる。心配するな」という一文だっ

村森上